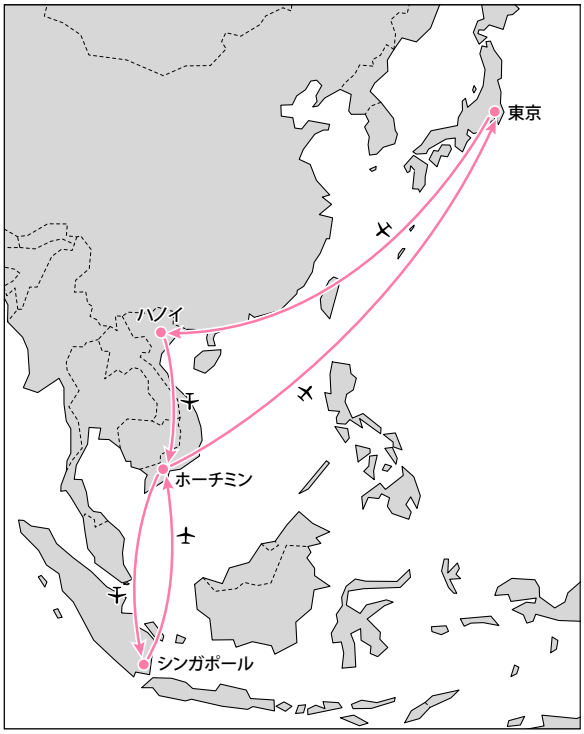
ベトナム・シンガポール・マレーシアを訪ねて
～「ぶぎん若手経営塾」第１回海外視察ツアーを終えて～



― スケジュール概要 ―

視察日程:2015年12月6日(日)～12日(土)

月／日	滞在地	旅程・視察先
12／6	移動	東京（成田）⇒ ハノイ
12／7	ハノイ	埼玉県ベトナムサポートデスク タンロン工業団地にて日系企業視察 ⇒ ホーチミン
12／8	ホーチミン	ロンドウック工業団地視察 双日ツーリストベトナムオフィス訪問
12／9	移動	ホーチミン ⇒ シンガポール　市内視察
12／10	マレーシア	シンガポール ⇒ マレーシア・ ジョホールバル地区 イスカンダル開発事務所訪問、 パシールグダン工業団地内日系企業視察 ⇒ シンガポール
12／11	シンガポール	双日アジアジャパンフードタウン事業 ブリーフィング シンガポール ⇒ ホーチミン経由
12／12	移動	ホーチミン ⇒ 東京（成田）

はじめに

「ぶぎん若手経営塾」で今年度初めて企画した海外視察ツアーについて、参加者のレポートを中心に編集し、ご紹介します。

第１回の視察では、ベトナムのハノイとホーチミン、シンガポール、マレーシアのジョホールバルと３か国４地区を訪れました。

社会制度や文化、経済特性等の異なる３つの国を視察したことで、それぞれの地域特性や現状・課題などに触れることができ、充実した視察ツアーとなりました。

今回の参加者は事務局を含め12名で、12月６日（日）の朝８時に成田空港に集合し、視察団の結団式を行いました。

結団式で決意を述べる村上団長

団長の株式会社サンワ製作所村上社長様より、今回の視察が有意義なものとなり、また全員が無事に帰国できるよう注意事項等を含め訓示をいただいた後、10時発のベトナム航空機でハノイに出発しました。

★ ベトナム・ハノイ

１）埼玉県ベトナムサポートデスク

最初に埼玉県ベトナムサポートデスクを訪問し、ベトナムの概要について学びました。

このサポートデスクは、公益財団法人埼玉県産業振興公社（国際ビジネスサポートセンター）の出先機関で、㈱NCネットワークベトナムが委託を受けて運営をしており、当日は午前９時より、企業PR部長の鈴木一也氏を講師に迎え、広範囲に亘るレクチャーをいただきました。

鈴木部長のブリーフィング風景

埼玉県ベトナムサポートデスクのディスプレイ

参加者レポート

村上忠彦氏

埼玉県サポートデスクの鈴木部長に、ベトナムの市場概要から経済指標、労働市場等多方面にわたる詳細な説明をいただき、これから視察を行うにあたり、大変参考になる情報をいただいた。

宇津城尚俊氏

サポートデスクでは「NCネットワークベトナム」の鈴木氏の話の中で、「外国資本による携帯電話の輸出が増え、貿易収支が黒字に転じた」との話がありました。今後も携帯電話からスマートホンへの切り替え需要もあり、この状況は続くとの印象を受けた。

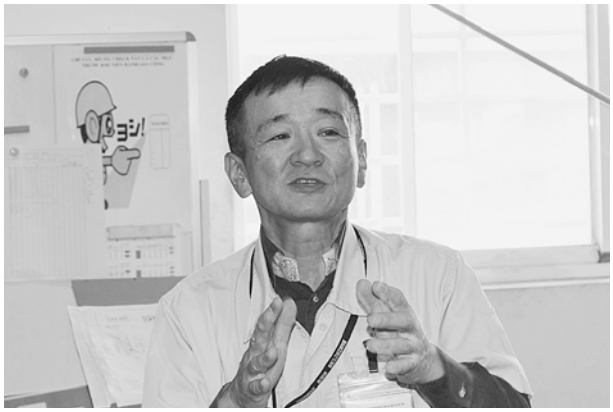
染谷　周氏

現在のベトナム経済状況は、日本の宮城県とほぼ同等とのはなしでしたが、GDPは右肩上がりで、今後さらに伸びると予想される。日本と比べ、物価は安く労働賃金も安価との認識でしたが、年々最低賃金も上昇し、税の問題などもあるとの話もあった。

2）タンロン工業団地①
Y.H SEIKO VIETNAM

埼玉県ベトナムサポートデスクがあるハノイ市内からバスで30分ほど移動し、タンロン工業団地に到着しました。

現地日系企業の最初の視察先は、2011年11月より同工業団地の賃貸工場に入居している金型メーカーの「Y.H SEIKO VIETNAM」です。小物精密プラスチック金型の設計・製造を行っている同社は、日本からの技術支援を基礎に、ハノイの地で超精密な「ものづくり」を追求し、さらに広い領域へ躍進する工場を目指すと、吉中社長が創業からの苦労話を交え、熱弁を奮ってくださいました。



熱く語る吉中一夫社長

工場内を案内していただいた現地スタッフと
吉中社長（前列右から２人目）を囲んで工場の前で

参加者レポート

前田栄治氏

当社は、本社を日本の福井県に置き、ベトナム社より研修生を日本に派遣して色々な技術や日本語を習得させているとのことで、日本の技術の高さを改めて実感しました。その高い技術をベトナムの人々に教えていき、自分たちがその学んだことを継続することで、いかに国に貢献できるかを教育し、夢を与えているところがこの会社のとても素晴らしいところであると思いました。

須永　亮氏

東南アジアへの進出と聞くと、人件費及び物価差によるコストダウン目的又は、進出関係メーカーの追随をイメージしていたが、最低賃金のベースアップ、国内産業の未発達による資源の現地調達率の低さ等、純粋なコストダウン目的でのベトナム進出は厳しい実情にあるとの印象を受けた。

日本とは違うローカルルール、国民性の違う人材を育成する苦労を体験されたうえで語られた海外進出時に大事なこと「法律を知る（コンサル会社は必ずしも法律に精通しているとは限らない）」、「海外でも企業は人なり」という言葉が、大変印象に残った。

染谷　周氏

吉中社長自ら熱心に説明をいただいた。その内容は、社長自身がベトナムに進出した際に苦労された話で、大変勉強になった。「海外でも、企業は人なり」とのお話しに、私もその通りだと思った。

天田　裕氏

社長自身がリーマンショック以降に会社の生き残りをかけて海外進出を計画し、進出企業が少なく２次下請けの地位が確保可能（国内や中国では４次下請け）と判断しベトナムを選んだこと。しかし、販路がない手探りの状態であったため、受注少なく赤字が続き５年目を迎えてようやく利益確保が可能となるなど、苦労の連続であったとのこと。また、「技術面は勿論だが、やはり人材教育が一番の悩み」との話があった。

「自分が学んだ技術がいかに素晴らしく、それを継続することでいかに国に貢献できるかを教育し、夢を与え、恩（国・親・家族・先祖、その他恩人）に報いるという道徳的な考え方を教育したい」という吉中社長の言葉が印象的であった。

3）タンロン工業団地②
DAIWA PLASTICS THANG LONG

現地日系企業で第２番目の視察先は、2005年７月より同工業団地内でプラスチック成型加工業の工場を操業しているダイワプラスチックを訪問しました。帯谷社長のユーモアを交えた説明に、皆リラックスして耳を傾けていました。

帯谷社長の熱心なブリーフィング風景

タンロン工業団地入口のモニュメント

ダイワプラスチック・タンロン工場

村上忠彦氏

帯谷社長の今日に至る経緯やハノイに関してのお話が面白可笑しくて、とても印象に残りました。今後タイ・プラスワン（チャイナ・プラスワン）の情勢を意識して、ベトナムについて勉強し、チャンスに備えようと考えています。

遊馬幸恵氏

ご説明の中で、海外進出における注意点として「仕事の当てをある程度確保してからでないと、日系だから何とかなるでは何ともならない」、それに加え、「現地の法律・習慣・国の特性等も把握する必要がある」との説明があり印象に残った。

また、ベトナム人は学歴によって上下関係を重んじるので、従業員のプライドを傷付けないよう、それらをうまく利用することが事業を成功させる秘訣と感じた。

参加者レポート

志村和義氏

当社は大阪に本社を置く大和合成㈱のベトナム法人で、自動車部品を主力商品として、1997年ホンダ・ヤマハ・キャノンなどからの受注獲得を目的に当地に進出した。工場内の印象は、とても整理整頓がされており、従業員も礼儀正しく日本語で挨拶するなど日本国内の生産モデルが受け入れられている感じがした。

ベトナム人は、勤勉で穏やかな気質のためストライキや暴動が起こり難いメリットがあるという。最低賃金の引上げで８年前に比し人件費が3.5倍となっているが、それでもまだ安価であり、社員旅行や記念パーティーなど福利厚生面にも配慮しつつ人材確保しているとの話であった。

ベトナム・ホーチミン

1）ロンドウック工業団地

ロンドウック工業団地は、ホーチミン市から車で約40分程度に位置し、タンロン新国際空港からも20分、カトライ湾からも40分と、ベトナムにおける製造拠点として、陸路、海路、空路ともに理想的なロケーションにあります。

また、利便性に優れた先進の工業団地として、より安定した製造を行うために、高度なインフラが整備されています。

工場団地入口のモニュメント

賃貸工場部分の建物視察風景

マネジメントオフィスやレンタルオフィス、税関出張所、日本食レストラン、コンビニなどを備えたサービスセンター

4タイプのスペースが用意されたレンタル工場

参加者レポート

宇津城尚俊氏

工業団地内では、電気・ガス・水道の十分なインフラサービスと日本食レストランも完備されており、工場の建物をレンタルするサービスもあることから、企業が進出しやすい環境が整えられていた。

この工業団地がベトナム国内の旺盛な需要を満たすための物流的・戦略的拠点になる可能性は高いと感じた。

染谷　周氏

工業団地事務所の鎌田氏より、詳細なブリーフィングをしていただいた。前日訪問した日系企業のように進出した側ではなく、招き入れる側の人の話が聞けて勉強になった。敷地内に税関や発電設備等が整備されており、進出してくる企業にとっては大変条件が整った工業団地であると感じた。

前田栄治氏

この工業団地は270ha（東京ディズニーランド6個分弱）ととても広い団地で、電気・ガス・上水などは24時間365日保守管理及び定期点検を行い供給されているため、進出企業は大変安心できる場所だと感じた。レンタル工場もあり、これから海外進出を考える企業にとって、大変素晴らしい環境と思われる。

2）双日ツーリストベトナムオフィス・ホーチミン市街

ベトナム最後の訪問場所は、双日ツーリストベトナムオフィスでした。ベトナムオフィスの山口所長から、ベトナムの現地情報セミナーを１時間程度レクチャーいただいた後、ホーチミン市街を視察しました。

今回の視察でお世話になった双日ツーリストベトナム

バイクに占領されているようなホーチミンの朝の風景

参加者レポート

遊馬幸恵氏

予想していたよりも街並みのきれいさ、生活している人々の活気を強く感じた。人口が毎年100万人以上増加し、労働人口も比較的若いことが、ベトナムの大きな魅力となっている。また、ホーチミンは暖かい気候のせいか、ハノイに比べ物事を楽観的にとらえているように感じた。

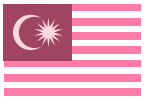
須永　亮氏

高層ビルやフランス植民地時代の影響を受けた西洋風の建物、老朽化した粗末な建物等、雑多な建物が混在した街並みに道路を埋め尽くさんばかりのバイクの大群はまさに圧巻で、想像を上回っていた。成長期にあり、これからますます発展をしていくであろうホーチミンは、街・人等、目にするものすべてに熱気や活気があふれており、自分自身の仕事や私生活についても熱意や活力をもって行動しなければいけないという刺激を受けた。

天田　裕氏

ホーチミン市は長らくフランスの植民地として占領されていた歴史から今も数多くの西洋風建物が残されており、近代的な建物と共に街並みに彩りを添えていた。しかし、道路事情は良好とは言い難く、数多くのバイク乗りが車や歩行者をかわしながら曲乗りのように走り過ぎていくのには驚かされた。

国民の平均年齢が28歳という異常な数字を見るだけで、この国が歩んできた過酷な運命を垣間見る思いであった。しかし、その歴史を払しょくするように街は活気にあふれ、人々の表情は明るかった。我々が宿泊したホテルは、広い公園通りに面していたが、深夜になっても家族連れや男女が大勢連れ立って集まり、明るい表情を見ると、この国の未来に力強い鼓動を感じることができた。



マレーシア・イスカンダル地区

1）イスカンダル計画事務所

マレーシアは、シンガポールから橋一つ渡って行ける場所ですが、途中に出国審査と入国審査を受ける必要があります。バスを２回降りて、パスポート等の提示を求められるなど、僅かな距離でも、入国に時間がかかりました。

イスカンダル計画事務所では、ジョホールバル地区で現在進められている５か所の開発地域の説明がありました。

計画事務所のザイハン氏とマンドゥ氏（手前は通訳の女性）

参加者レポート

村上忠彦氏

事前に簡単な情報は頭に入れていきましたが、ザイハン氏・マンドゥ氏のご説明によって良く理解ができました。このようなケースではいつも思うのですが、やはり英会話は必須ですね。

志村和義氏

ここイスカンダル計画事務所の説明で印象に残っているのは、まず、この計画への投資国の第１位がシンガポール、２位が中国、３位アメリカ、４位日本の順となっている点でした。日本からの投資が意外と少なく、中国の投資が思いのほか多いと感じました。東京都とほぼ同じ面積の地域を、５つのブロックに分けて開発を進めている大規模都市開発計画地を目の当たりにして、スケールの大きさに感銘を受けた。

2）パシールグダン工業団地内日系企業視察

大手油脂製品メーカーのライオン㈱で小林所長様より、マレーシア経済について及びジョホールバル地区についてのブリーフィングを受けました。

小林所長によるブリーフィング風景

ライオンのマスコットと一緒に記念撮影

全員の名前が入った歓迎表示に一同感激

参加者レポート

宇津城尚俊氏

ライオン㈱の小林氏から、国民性についての話題があり、マレーシアの国民性は大変おおらかで仕事を辞めたくなったら直ぐに辞めてしまう傾向があるとのこと。給与レベルの高いシンガポールがすぐ隣にあることも影響し、従業員の引き留めに苦労しているとのことでした。これは、マハティール首相時代に、日本を手本に急激な工業化・経済発展を実現させたイメージがあったので、少し意外に感じました。また、従業員の民族構成が複雑ですが、長い歴史のもと、民族同士が融合しており、おおらかな国民性が民族間の対立を緩和しているという印象を受けました。

前田栄治氏

小林氏からお聞きした話の中で、「ジョブホッピング」の話があり、マレーシアから国境を越えて毎日シンガポールへ働きに行く（２～３時間かけて）人口が10万人近くいると聞きとても驚きました。車やバイクで国境を超えて仕事に行くということは、日本との環境の違いを実感しました。

天田　裕氏

今回訪問したライオン㈱は世界で初めて植物由来の原料を使用した洗剤を製造・販売した企業であり、子会社である当社も現在パームオイルを主原料とする界面活性剤を使用した洗剤を主力製品に世界を市場として事業展開を図っている。

ライオングループは、これを世界の洗剤原料の標準とすべく取り組んでいる点が大変素晴らしいと感じた。マレーシアは、人口のうち８割がマレー系であるが、中華系・インド系等の複数民族が暮らしており、民族ごとの宗教や風習の違いで、正月休み（計５回）への対応や、イスラム教徒のために工場内に礼拝所を設けるなどの配慮も必要となるとのことであった。

シンガポール

1）双日アジアによるジャパンフードタウン事業

勅使河原所長様より、シンガポールの伊勢丹オーチャード４階フロアー（550坪）で近く開業が予定されている日本企業によるフードタウン事業の説明があり、質疑応答が行われた。

双日アジアの勅使河原所長によるブリーフィング風景

参加者レポート

遊馬幸恵氏

シンガポールでは、本物の日本食レストランを紹介するため、伊勢丹オーチャード４階フロアーに2016年５月のオープンを目指し、計画が進んでいる。特色としては、企画・建築・管理等すべてを日本企業が行い、日本食に似せたレストランとは差別化を図っている。しかも、シンガポール初出店のテナントばかりを集め、目新しさも売り物にしている。出展企業にとっては、シンガポールは親日的・貪欲な購買力・商業の中心地であり、この地域で成功すれば、他国への進出時のブランド力強化にも繋がる。

須永　亮氏

シンガポールは、まさに「人類のるつぼ」でした。バスの車窓から見える街並みを見て、最初に感じた事です。街の建造物は、超高層のビル群から植民地時代の名残りを感じさせる歴史的なものまでが混在し、多種多様な人種の方が闊歩している様からは、人口密度の高さ・犯罪率の低さが見て取れる。ジャパンフードタウン事業もこうした順調な拡大がみられるアジアの消費市場に着目し、日本国内から東南アジア市場への企業の橋渡しを行い、日本企業のおもてなしサービスを伝播することで、更なるインバウンド効果が期待されるとのことでした。

志村和義氏

シンガポールが経済発展を遂げた理由には⑴外国資本に対し開かれた政策である⑵アセアンの中心という地理的優位性⑶資金力・人材調達力に優れている⑷都市力（国内外のインフラ充実）⑸低い税率などがあげられると思う。ジャパンフードタウン事業については、日本企業が独自のアイデアにより「アジアのショールーム」的なビジネスモデルを構築して、今後シンガポールに止まらず、ASEAN各国へ事業展開していただきたいと感じた。

終わりに

この度の海外視察に際し、「埼玉県ベトナムサポートデスク」を始め視察先企業の皆様から貴重な情報や多大なご支援ご協力をいただきました。本紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。

最後に、今回初めて海外視察の事務局を務めさせていただきましたが、至らぬ点多々ございましたことを参加者の皆様方に深くお詫び申し上げます。

（事務局　鈴木三知男）

参加者（敬称略）

会　社　名	氏　名
株式会社 サンワ製作所	村上　忠彦
株式会社 サンワ製作所	前田　栄治
株式会社 シンコーハウス	宇津城　尚俊
株式会社 シンコーハウス	須永　亮
株式会社 あすま不動産	遊馬　幸恵
株式会社 染谷製作所	染谷　周
株式会社 武蔵野銀行	天田　裕
株式会社 武蔵野銀行	志村　和義
双日ツーリスト 株式会社	中村　博之
株式会社 日刊工業グローバルビジネスサポート	藤坂　浩司
株式会社 ぶぎん地域経済研究所	鈴木三知男
株式会社 ぶぎん地域経済研究所	佐藤　洋子